
学部留学生の日本語学習における 実際と問題

三 原 裕 子

1. はじめに

本学部の学部留学生は外国語代替科目として日本語を履修し、1年次2クラス、2年次、3年次各1クラスが設置されている（2001年度現在）。

ここでは、私が担当している2年次の中級日本語（カリキュラム名称「日本語Ⅳ」）、3年次上級日本語（カリキュラム名称同様）及び理学部1年生を対象とした初級日本語（カリキュラム名称同様）のうち初級を中心にその実際を報告し、クラス運営上の問題点について報告していきたい。

担当授業としては以上の3クラスであるが、「留学生や帰国子女など日本語能力の不足により修学が困難な学生」を支援するために設置されている日本語カウンセリングの相談内容と、本学が行っている短期留学生受け入れによる初級クラス¹⁾、および2001年度後期担当科目の「日本事情」履修者9名（全員が初級から中級の日本語レベルと考えられる）についても触れていく。

2. 授業の構成員と内容について

1 年初級クラス

・履修登録者は理学部情報科学科の2名

- ・生年はともに1978年で、中国の大連と上海の出身である。
- ・日本語学習歴は学部入学以前の1.5年と2年で、学習は日本が初学である。²⁾
- ・卒業後の進路は、日本での就職を希望するものと帰国して中日合弁会社への就職を希望するものがあった。
- ・授業は毎回プリントを用意し、表現文型とテープの聞き取りを含めた会話を中心にすすめている。

初級クラスとは日本語能力検定試験の三級程度合格者が想定され、これは基本的な文法・漢字・語彙を習得し、日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章の読み書きをこなせる能力を持つものを言う。³⁾

担当するクラスについては必ず授業の始めに自己紹介をおこない、学生の能力と学習の目的、いわば学生の日本語学習のニーズについて調査を行っている。

自己紹介は、皆の前に立って口頭の自己紹介をすることでフォーマルな場面における「話す」能力を見ることができ、その後のインタビュー形式自己紹介文によって「書く」能力をも見ることができる。これは中・上級クラスでも実施するため、私が担当したクラスに限って言えば、年次が上がれば複数回に及ぶ。結果は予想される通り、文の長さは年次が上がるほど長くなり、語彙数も増加傾向を示す。

まずはこの自己紹介文について様子を紹介する。

初級ではふつう、インタビュー内容についての回答を箇条書きすることから始まるが、文法的な誤りはほとんど現れない。もちろん、箇条書き程度の短文では文法に関わるものが少ないことが主な要因であろうが、多くの初級者がすでに日本語文法の基礎を学習済みであることと、その内容についての記憶の新しさが文法上のミスを少なくさせたことの一因かと思われる。実際日本語学校を卒業して数年たつ中級学習者の悩みの一位は、「折角覚えたこと、みんなわすれた」(経営2年、中国出身)に代表されるように、基礎知

識が更新されることなく、発話に支障をきたすほどの「忘れ」ぶりにある。これは一部の日常語以外は、その使用場面が極端に少ないことから来る困難であり、アジア系留学生が大部分を占める本学留学生においては読解能力は獲得しているが、表現能力は著しく低下しているというのが現状のようである。

3. 初級クラスの実際と問題点

i 自己紹介文

初級レベルでの最初の学習としては「自己紹介文は口頭発表でおこなったと同じではない」こと、すなわち書き言葉と話し言葉の違いについて注意を喚起し、説明することからはじまる。壇上では「こんにちは、わたくしは〇〇と申します。××で生まれ、3歳までは、中国の…」と発話した学生が、その通りに羅列した文章を書くことが多い。

特に中国出身の学生の場合は、箇条書きの習慣が日本ほどにはないことや、句読点についての関心が薄いこと、「だ」と「た」や「が」と「か」等のいわゆる有声音と無声音についての明確な対立が意識されないことを示すミスが目立つ。これは中級学習者との顕著な違いであって、中級のミスは助詞使用などの文法事項に関するものに集中していく。

初級者の文（2000年度初級クラス履修者）と同一学習者が中級クラスになってからの文を例にあげる。

【Aさん 初級時】「わたしは〇〇（名前）です、出身は中国の遼寧省。1978年3月にうまれました。今は横浜市…にすんでいます。音楽をきくことが好きです。スポーツがすきです、将来は中国にかえて、会社を建てたいです」

この文からは箇条書きにする指示が理解されなかったための羅列や句点と読点の混乱、「住んでいます」の「い」が省略された、文章語としては一段

くずれたととらえられる表現、促音の脱落などのミスが見られる。

長文を要求した一年後の中級クラスでは、この学習者の文は以下のようになった。

【Aさん 中級時】「わたしは〇〇と申します。おととしの4月に中国から日本にきました。日本にきた前は、日本語をまったく勉強しませんでしたので、大変なことがいっぱいありました。横浜市にある日本語学校に一年間で日本語を勉強して、昨年の4月に大学に入りました。スポーツと音楽をきくことが趣味です。卒業したら、父親の会社に入ります。どうぞよろしくお願いします。」

まだ助詞の使用ミスや漢字の送りの問題、全体を通じる手紙文的な表現など、完璧な文とはいえないが、句読点他の困難はクリアしており、文章は成熟してきている。自己紹介文程度の内容であれば、さほどのスキルは要求されていないが、初級者が論説文を書くに至るためには、かなりの学習支援が必要なことは自明である。

ii 語彙の認識——外来語調査から

初級では教科書を多く使用する上に留学生は他の日本人学生とともに一般授業にも出席するわけであるから、長文の理解習得は早い。ただし、積極的な語彙の獲得がなされない場合、語彙数は少なく、そこから派生する困難は多い。

第一に聞いた内容と語彙とを結びつけることの困難さが挙げられる。

類推可能な語彙が少なければ当然のことであるが、外来語のようなものは上級者であっても類推はきわめてむずかしい。授業（2000年から2001年実施）の際におこなった外来語調査についての概略を以下に報告する。調査方法・項目立てとその内容他については末尾<付1>をご覧ください。

調査は初級から上級までの学習者20（中国籍15，台湾籍2，韓国籍2，カナダ籍2）人について、外来語40語を対象に「使う・知っている・聞いたこ

とはある・知らない」を回答してもらった。ここでいう外来語とは漢語以外の、欧米諸言語から借用したものに限定し、「使う」とは「理解している」ことを意味するとした。

外来語はインフォーマントには分からないようにして5パートを設定し1パート各8語を項目立てた。項目については、Part 1は日本経済新聞の社会・経済面（1999～2001）に記載され『カタカナ・外来語／略語辞典』⁴⁾に項目があったものを、それ以外は文化庁『言葉に関する問答集 外来語編』（新「ことば」シリーズ6，8 平成9，10）を参考に項目設定をした。

Part 2はすでに国語に溶け込んでいてもまだ外国語由来の感じが残っているもの、Part 3はいわゆる基本外来語といわれるもので、国語に取り入れた時代が古いもの、Part 4は外国語が外来語になった際に、語形・発音が大きく変わったもの、Part 5は英語由来以外のものである。

初級では約1/3から1/2、中級は幅があるが多くの2/3程度の既知率だった。調査の正確さを期するために、「書き終わったら、いくつかの語について、意味を尋ねる。またはその語を用いて、短文を作ってもらおう。」旨をあらかじめ伝えたために、学生が「使う・知っている」と回答することに消極的であったための低率とも考えられるが、おおよそその実態はそのようなものであった。

当然使用率はきわめて低く、滞日年数が長いほど「使う」「知っている」は増えていく。生活に関連するものについては既知の度合いが高いが、ニュースなどに頻繁に登場する語であっても「リスク」「ネットワーク」といった語は学習レベルにかかわらず「知らない」が多かった。「インフォームド consent」⁵⁾は、平成9年の「国語に関する世論調査」で「見たことがない」が「ある」を上回ったとされる語であるが、留学生のほぼ全員がこの語を「知らない」と回答していた。

予想通り Part 1の高得点者は「新聞を毎日見る、時々見る TV を毎日見る、時々見る」者というように、実生活に日本をとりこもうとの姿勢を持つもの

が多かった。

性別では、男子学生が滞在歴・学習歴ともに平均3年であるのに対して、女子学生は平均が2年であることが影響しているのか、調査語彙を「使う、知っている」割合は、男子の方が高い。パート別に見ると、Part 1の時事外来語（社会・経済面にあらわれるような語）とPart 3の基本的な外来語はほぼ拮抗しているが、英語由来ではない語を含むPart 5は男子学生の半数（12人中5人）が多くを「使う」「聞いたことがある」と回答しているのに対し、女子学生8人中4人が全語「知らない」という結果であった。

日本語学習歴や滞在歴の長さが大きく影響したのはPart 2で、4年以上の学習歴者は約7割の語を「使う」と答え、3年から2年半のものと、2年から1年のものは「知っている」語と「聞いたことはある」語が拮抗し、点数的にもほぼ同じである。

総合的には低得点だったPart 4、Part 5では首位を韓国留学生らが占める結果となった。英語由来以外の外来語（Part 5）は得点の幅が大きく8語全部を「知らない」と答えた学生も6人いた。

また、英語由来の語であってもビクトリア大（カナダ出身）留学生とアジア出身留学生による目立った偏りは見られなかったが、当結果はこれらの語が元音を反映したものではなく、日本語化が定着した語であるためと推測できる。各語の傾向については、省略によって変化したもの、文法的に変化したもの、発音が原音と乖離しているものなど、個別の要因が考えられるが、一々の語についての精査は別稿にゆずる。

短期留学生が回答するにあたり、一覧表の欄外に平仮名を記して、これをローマ字化し、次に英語に置き換えたメモ書きがあった。⁶⁾これは外国語が日本語化していく過程の逆の道筋を辿っていることで、留学生の外来語理解の一手段であろう。

また、上に引いた「リスク」や「ネットワーク」といった語が生活用語ではないために、留学生の日常生活において聞くチャンスがさ程多くはないと

いうことも一因であろうか。

日本語のニュース聴解や新聞読解の能力を向上させる一助として、これら外来語の理解支援は必要かと思われる。特に、アジア系留学生の過半が、将来日系企業をはじめとした、日本社会と関わりのある職種への就職を希望している本大学においては、尚更なことであろう。

本校では一年次選択科目（半期）に「日本事情」が設置されているが、日本の風俗・習慣や会話表現における日本人固有の反応などのほかに、これら外来語についても、語学授業とは別の視点からのアプローチが必要であると感じている。

iii イメージの陳述

初級に限らず、中・上級であっても同様と考えるが、学習者の多くは語彙を駆使した長文作成に習熟しておらず、自分の意見や心理状態を説明することに困難を感じている。学生はまじめであればあるほど、内省的であればあるほど、外国語を用いて自己を表現することの稚拙さに悩まされる。

言うまでもなく、教室内の使用語は学習語の日本語のみであって、発表や意見交換もすべて日本語に限られる。このような制限下にある学習者らは具体的な事象については、簡単な語彙と文で「書き」「話す」ことができて、抽象化された事柄、——イメージ的なものについての陳述は未熟であって、フラストレーションは溜まる一方である。特に短期留学の場合はこの苛立ちは大きく、母語による自己意思の発信とそのコミュニケーションの喪失は多大な焦燥感を与えているようである。これは滞日年数、言い換えれば学習量の増大によって次第に解消される問題ではあるが、そのような苛立ちを抱えたままの学習は教室内に不満の残るものと考え、時には母語を交えての発表や母語による作文の添付を許可する場合もある。

出身国が複数の場合、中国語による発表の際は、同国語話者が韓国語や日本語話者（ここでは日本語教師）に、教室内共通語の日本語で説明、解説を

おこなう方式をとる。英語話者クラスでも同様であった。このことは学習者のフラストレーションを一時的に解消させるとともに、コミュニケーション能力獲得の必要性を学習者に自覚させる上で有効と考えられる。

ビクトリア大学留学生にはフィールドワークとしてカナダと平塚の物価比較を課したが、レポートは英語と日本語の2部を提出してもらった。日本語文は800字程度のものでマクドナルドハンバーガーの味に対する比較文であったが、英文はレポート用紙2枚にわたる経済比較論であった。日本文では食べ物をベースとした生活基本語彙を使用した短文であり、母語のものは専門用語を駆使した意見文として評価し得るものであった。

短期留学の場合は「書く」能力よりも日本をトータル的に知るための「聞く」「話す」能力の習得支援が目的となるが、大学学部生には、レポート作成をはじめ、最終目的としての卒業論文、修士論文の作成技術が要求され、「書く」能力に対する必要度は短期留学生に比べてはるかに高い。短期留学生は学習目的として、「日本人と話がしたい」というコミュニケーション手段としての日本語習得を第一に挙げるが、以上見てきたように大学学部留学生は「講義やマスメディアからの情報を正確に聞き取って理解する」ことや「レポートを作成するための適当な表現力と正確な文章力」もあわせて要求されていることがわかる。

次に、留学生の学習支援を目的とするカウンセリングの場から、日本語学習者が抱える問題を考える。

iv カウンセリング利用の実態

カウンセリング相談では奨学金申請等の書類作成、レポートの校正が多く、日本の生活習慣に対する質問（結婚式に招かれたがどうしたら良いか）なども見受けられる。来室者は初級よりも中級・上級の学生が殆どで、5月以来の来室は中級と上級が半々であった。（一人が複数回に及ぶ場合もある）。あらかじめ電子メールで来室を告げてくる者や、添付ファイルを送信してくる

者に対して来室を促すなどの方法をとるケースもある。

書類作成については、誤字や文法上の誤りを指摘し、その場で直せるものについては本人に修正させる。後日改めて書き直しを持ってくる学生もいた。予め添付ファイルで送られてきたレポートについては、内容に抵触しない範囲で、日本語上の誤りを指摘するなどの方法をとっている。

このカウンセリングの利用状況からは会話能力はあるが文章作成能力には自信がないという日本語学習者の意識や、生活体験数が増えるほど日本社会に対する疑問や困難も増えるという留学生の実際を知ることができる。

v 発音学習

初級学習のはじめに接する問題として、発音学習がある。ここで発音矯正、発音指導ということばを用いないのは、「矯正」がはたして必要であるかどうかは個別の問題とらえられるからである。「矯正」というからには正しい発音という対極に位置するものが想定されるが、学習者の学習目的によって、どこまでの指導が必要かの幅は実際のところは狭くはない。教室内では「会話において誤解を生じないように発音」することを限定した目的とし、それ以上の注意は各個人別におこなっている。上級者になるほど、学習には余裕がうまれて、発音に対する指導を希望するものが増える傾向があるが、ここでは初級学習における発音指導の実際を報告する。

①教室内の学習目的と指導法

学習者に対してはあらかじめ、「話の内容を正確に相手に伝達するために必要な発音の獲得」を学習目的としていることを説明する。この段階では、コミュニケーションに支障をきたさないとされるものについては、多くの場合指摘をしない。発音は初期の段階で習得しなければ、修正がむずかしいという指摘もあるが、初級早期に発音についての時間を割くよりも、初級後半から発音に対する個別の指導をおこなって、ネイティブと自己の発音の違

いを気付かせ、徐々にレベルアップをはかった後に、上級でブラッシュアップするというのが、最も効率的かと思われる。個人差があるために一般化はできないが、現段階ではこの方法で、学生自身による適切な発音の修正がなされている。無論「気付き」については個人差が大きく、上級者であっても、なかなかその違いに気付かないケースもあり、いっそうの工夫と研究が必要と考えている。

②発音と表記の実情

前項では初級における発音への注意喚起は、第二段階においてのほうがより効率的であるとしたが、初級の誤りのうち最も多いものもまた、「自分の発音したとおりに書く」——発音に関連する問題である。初級授業では、書くことよりも会話や聞き取りに重点が置かれるため、教師が学生の書き間違いに接することは多くない。留学生の誤表記は大別して二種類ある。一点は前述のように、発音した通りに書くために、発音の不正確さが表記に反映してしまうケースである。これは特殊音節の発音が難しい中国・韓国などのアジア系学生に多く見られるが、時には中・上級ではあっても「出張」からの類推によるか、発音が「そう聞こえる」ことによるか、「出場」を「しゅっじょう」と誤答する場合もある。また、英語由来の外来語については、「サポートセンタ」(サポートセンターの意)など、引音関係の誤記が目立つが、日本語化した外国語の発音と表記はかえって迷いやすく、間違いやすいものの一つのようなのである。

二点目は発音と表記の乖離であって、発音上は「セート」であるのに表記は「せえと」ではなく「せいと」であるということに戸惑いを覚える場合が多いが、この点については一定のルールに従えばさほどの困難はなく解決する間違いかと思われる。これは発音と漢字が容易に結びつかない非漢字圏の初学の学生に多く観察される。

「発音」の問題はこのように「話す」能力の範囲に留まらず、「聞く」「書

く」など、広範囲な場面に影響を及ぼし、トータルの日本語の力を発揮させる基になっていると考える。正確な発音をどう徹底していくか、どの段階で修正を導入するのか、円滑な会話のために必要な他の要素（助詞や言いさし、あいまいな表現など）とのバランスをどうとっていくのか、さらに検討をしていきたいと考えている。

4. おわりに

留学生の多くは一般日本人学生と同じ授業を受け、日本語の中で生活しているにもかかわらず、日本語理解の体系化、整理化が進まない環境下にある。また、授業時間以外は専ら同国語話者同士で話をしているために日本語の語彙数も限られたものに偏り勝ちである。このような環境の中で、氾濫する日本語をどう「交通整理」するかが週一コマの日本語授業に求められているといえよう。

初級段階では学生の学習ニーズに配慮しながら、「話す」「聞く」「書く」の相互関連を理解させ、必要がある場合は日本語史の内容を加味した解説⁷⁾をおこない、知識の整理を支援する形をさらに発展していきたい。

<付1 留学生の外来語認識>

調査実施時期

2000.10 ビクトリア大学短期留学生 2 名（1980.1979生）男女各 1

2001.4 神奈川大学初級学生 2 名（1978生）男女各 1

2001.9 神奈川大学初級学生 9 名（1973～1980生）男 5，女 4

2001.10 神奈川大学中級学生 7 名（1973～1978生）男 4，女 3

各々授業時間内、10～15分程度を利用した。アンケート用紙配布時に、「外来語をどのぐらい知っているか」というアンケートであって、テストでは

ない」ことと、「後で‘使う’と答えた語については、文を作ってもらうかもしれない」ことを前置きし、回答後には各語についての解説をおこなった。

調査表

調査表には、氏名、生年、5歳から15歳の間住んでいたところ、日本語学習歴、日本滞在年数等のほかに、「新聞をよみますか？ 毎日読む・時々読む・読まない」「ラジオやテレビのニュースを聞きますか？ 毎日聞く・時々聞く・聞かない」という項目を設けた。多くは「時々読む、時々聞く」と回答しており、新聞を毎日読む者は3人、ニュースを毎日聞く者は4人だった。新聞をまったく読まない者も3人いた。

調査語彙

調査語彙を次のような部立てにして、留学生の外来語理解の難易と理解の傾向を概観した。Part 1からPart 3までは国語審議会が「外来語の表記」を答申（1991）した際の外来語規定⁸⁾を参考にした。調査には漢語由来と同様に中国語・朝鮮語からの語、および混種語も除いた。調査用紙にはこの項目の別は明記せず、Part 1から5までを拍数の短いものから羅列した。

Part 1 外国語の感じが多分に残っているもの。

授業期間とほぼ時期を同じくする期間に、新聞の社会・経済面に出現するような語で「最新カタカナ語」と考えられているような語を選択した。リスク、シェア、リストラ、ネットワーク他

Part 2 すでに国語に溶け込んでいるが、まだ外国語に由来するという感じが残っているもの、国語化した語形を片仮名で書き表すもの。ショップ、イメージ、アドバイス、パンフレット他

Part 3 国語に取り入れた時代が古く、国語に溶け込みきっていて、外国語に由来する感じが余り残っていないもの。答申前文では、「てんぶら 天麩羅」や「じゅばん 襦袢」が挙げられているが、調査では私に範囲を広げて、パン、ガラス、ボタン、ズボン、コップなどを選択した。

Part 4 外国語が外来語になった際に省略や短縮がおこなわれたり、近い

と見なした日本語の発音の型にあてはめたりすることによって語形・発音に大幅な変化があったと思われるもの。スベル、グラビア、オフレコ、ディスコ他

Part 5 英語由来以外のもので、比較的新しい時期に入ってきたと思われるもの。メス、ピエロ、ガーゼ、ソプラノ他

各8語を「使う」6点、「知っている」5点、「聞いたことはある」3点、「知らない」0点で扱った。「知っている」とは意味を理解していることという注意を予めおこなった。

この方法では「使う」者と「知らない」者が各1名いれば、平均は「聞いたことはある」相当になってしまうが、おおむね回答の幅は狭く、極端な点差の見られる項目はなかった。便宜上の平均点を記す。

Part 1平均得点（以下平均得点の語省略）28, Part 2 ; 28, Part 3 ; 45, Part 4 ; 13,

余白に「自分が、使うか知っている外来語を書いてください」という項目を付け足したが、パソコン・システム・インターネットなどのIT関連のものとストレス・ベンチャー等の社会的に取り沙汰されているもの、食物関係の語が最も多かった。

<付2 日本語教育における能力基準>

日本語能力試験による一級から四級の認定基準はおおよそ以下のようである。

この認定基準によって、日本語教育では三級終了程度の日本語レベルを初級、二級終了程度のそれを中級、それ以上を上級として取り扱っている。

一級 高度の文法・漢字（2000字程度）・語彙（10000語程度）を習得し、社会生活をする上で必要であるとともに大学における学習・研究の基礎とし

でも役立つような、総合的な日本語能力。(日本語を900時間程度学習したレベル)

二級 やや高度の文法・漢字(1000字程度)・語彙(6000語程度)を習得し、一般的なことがらについて、会話ができ、読み書きできる能力(日本語を600時間程度学習したレベル)

三級 基本的な文法・漢字(300字程度)・語彙(1500語程度)を習得し、日常生活に役立つ会話ができ、簡単な文章が読み書きできる能力(日本語を300時間程度学習したレベル)

四級 初歩的な文法・漢字(100字程度)・語彙(800字程度)を習得し、簡単な会話ができ、平易な文、または短い文章が読み書きできる能力(日本語を150時間程度学習したレベル)

(『日本語能力試験結果の概要』より、要約)

〔参考文献〕

- ・あらかわそおべえ1943『外来語概説』(三省堂)
- ・坂本恵1994「学部留学生に必要な日本語力」(『下関市立大学論集』37)
- ・新「ことば」シリーズ6.8『言葉に関する問答集 ―外来語編―』
- ・姫野昌子他編1998『ここからはじまる日本語教育』(ひつじ書房)
- ・堀内克明1999.2000「最新カタカナ・外来語／略語辞典」(『現代用語の基礎知識』自由国民社)

注

- 1) ここでは1979.6～7 カンザス大学13名及び2000.9～12ビクトリア大学の2名におこなった初級クラス。
- 2) 大学入学以前の日本語学習については、本大学学部留学生の殆どが、来日1年から1年半を日本語学校で学び、入試によって入学している。
- 3) 日本語能力検定試験の規定では一応初級終了で三級、中級終了で二級、それ以上を上級とする。これらの級別能力については末尾<付2>をご覧ください

たい。

- 4) 全訂版1999.2000発行「現代用語の基礎知識」編集部編
- 5) 「国語に関する世論調査」(平成9年1月調査)文化庁文化部国語課のうち、外来語(カタカナ語)の認識 項目
- 6) ビクトリア大留学生の一人は「しょっぷ」→「SHYOTSUBU」→「SHOP」という順にメモ書きして理解をしていた。
- 7) たとえば同じ「オー」と発音するのになぜ「通り」は「とおり」で、「東西」は「とうざい」かといった類の質問が初級では多い。
- 8) 平成3年6月内閣告示・訓令「外来語の表記」